

森 有正の現代日本政治観

鈴木 宜 則
(2000年10月5日 受理)

MORI Arimasa's Views on the Problems of Contemporary Japanese Politics

SUZUKI Yoshinori

I はじめに

森 有正は、確かに、組織的に内外の政治思想（史）の研究を行うと同時に、自ら独自の政治思想を構築し、且つ日本の政治の改革に寄与しようとした、南原 繁や丸山眞男と同じような意味における政治思想家¹⁾ではなかった。しかし、彼は、絶えず内外の政治情勢、取り分け日本の政治に大きな関心を持ち、これを専門的に研究することこそなかったが、その特質を考察すると共に、日本の政治と社会の改革に心を砕き、意見を發表し続けた知識人²⁾であり、独自の政治思想を持つに至った思想家³⁾であった。このことを端的に示しているのが、次の三つの対話である。第1は、核物理学者でカトリック教徒の垣花秀武との対談（1966年11月、67年10月、68年10月の3回）、第2は、劇作家の木下順二並びに政治学者の丸山眞男との座談会（1967年秋）、第3は、評論家・小説家の小田 実との対談（1968年夏、1969年夏の2回）である⁴⁾。そこでは、この順に(1)現代世界の特徴、「超国家」共同体の可能性、権力と国家の問題、(2)日本の社会・政治と個人との関係、(3)変動する現代社会における政治や価値観・個人・市民の問題などが真剣に論じられているのである。

- 1) たとえば、加藤 節『政治と知識人——同時代史的考察——』（1999年、岩波書店）、128-9頁・『南原繁—近代日本と知識人—』（1997年、岩波新書）、175頁、バーナード・クリック「思想家、丸山眞男」、みすず編集部編『丸山眞男の世界』（1997年、みすず書房）、70頁参照。
- 2) 森は、「伝統や階級の壁を破って、支配階級の持っていた知識を労働者階級の所有にするその働きをする人」、という自分自身の定義にも合致した知識人であった（森有正・小田実『人間の原理を求めて 揺れ動く世界に立つて』、1971年、筑摩書房、168頁）。
- 3) 「丸山眞男氏に聞く 森有正氏の思い出」、『森有正全集』第12巻付録『森有正をめぐるノート』12（1979年、筑摩書房）、18頁。
- 4) 森 有正・垣花秀武『現代の省察』（1969年、春秋社）、木下順二・丸山眞男・森 有正「経験・個人・社会」、『展望』第109号（1968年1月号）、16-44頁、森・小田『人間の原理を求めて』。

こうした森の政治に対する発言は、この時期に限られたものではなく、彼のほとんど全著作の中に認められる。森は、既に早くこれらの対話の十数年前に書かれた日記の中の「定義（限定すること DEFINIR）」について述べた箇所語っている。「当時新しいといわれたブルードンの無政府主義的社会主义も、正義という旧い観念に対するかれ自身の定義ではないか。この考え方は、アリストテレスによって集大成されたギリシア思想の根底にある考え方であり、また特殊な意味において、ヘブル思想の根幹をなすものである。」⁵⁾と。ここに、森の政治や社会的正義に対する関心を読み取ることができるように思われる。しかも、その数年後に、森が「フランスのプロテスタンティズムは今日まで脈々として続いて、フランス社会の基礎となり、そこから派生的に様々な思想」（「17世紀の合理主義、ジャンセニスム、ガリカニスム、18世紀の啓蒙思潮、19世紀の実証主義やアナリシスム、あるいは社会主義……それとカトリシスム、権威主義に基く思想」）や運動を巻き起したと見、「そういう観点から見ないとフランスの政治の主体的要因がなかなか把めず、具体的客観的のようでないが、外側からの表面的観察で終ることが多い」と指摘する⁶⁾時、彼は、マックス・ヴェーバー的な政治文化の側面から、長期に亘る歴史的な文脈において政治を捉えようとしている⁷⁾ことが分る。

しかしながら、南原や丸山の場合とは異なり、森については、独自の「経験」や「思想」、日本文化・日本語論などの彼の哲学的、言語学的な側面に関する研究が中心であり、その政治論や政治思想についての研究は、筆者の知る限り皆無である⁸⁾。政治学者の丸山も、森の現実政治への関心を、「フランス人が一般に政治に対して強い関心をもつと同じように、政治に対する経験的、客観的な考察というよりは、人間として政治にかかわることに対する興味」と見ていた⁹⁾。これは、彼が通常「哲学者」と呼ばれていることに照らして、妥当な見方のように思われるかもしれない。けれども、森が政治について完全ではないにせよ方法論的に考察し、誤解も見られるが、独自の刺激的な見方を示すと共に、有益な提言を行い、体系的とは言えないにしても一定のまとまった思想を有していた、と考えられるのである。実際、森自身たとえば権力とは何か、自由とは何かという問題の重要性を認識し、これらについて理解を深める必要性を自覚している。森は、言う。

私は政治学の問題はよく知らないものですから、そういう問題をどう取り扱ったらいいいのかわからないのですけれど、そういうことばの定義の問題は非常にむずかしいと思うのですよ。これはこんご私どもも機会あるごとにしかるべき本を読んだり、人に聞いたりして深める問題だと思う

5) 森 有正, 1954年9月3日付の日記, 『バビロンの流れのほとりにて』(1968年, 筑摩書房), 129頁。

6) 森, 1959年9月6日付日記, 「城門のかたわらにて」(1958~9年), 同上書, 372~3頁。

7) ヴェーバーについては、たとえば、近著の加茂利男・大西 仁・石田 徹・伊藤恭彦『現代政治学』(1998年, 有斐閣アルマ), 134頁参照。

8) 比較的最近の研究書として、たとえば佐伯 守『自己と経験——森有正の世界から——』(1999年, 晃洋書房) 及び佐古純一郎『森有正の日記』(1995年, 朝文社)がある。

9) 丸山真男「森有正氏の思い出」, 22頁。

のですが、現在いちばん大きな問題は権力というものがだんだん——その権力がいかなる形であっても、共産主義の権力であっても、あるいは資本主義の権力であっても、権力自体のジャスティフィケーションと言いますか、そういうものが根底的に崩れてきていると思うのですよ。だから権力が権力自体で、つまり力がむき出しの力でもって作用する以外には作用の仕方が、なくなってきたという困った状態が、だんだん出てきているのではないか¹⁰⁾。

特に、日本の政治については、深くその文化・歴史・言語との関連、要するに、日本人と共同体との根源的な関係において捉えようと彼はした。

そこで、本論文は、森が政治を含む現代日本の社会の現状、それ故特徴をどう認識し、その政治のどこに問題があるかを見ていたのか、更に何がその根源であると考えていたのかを明らかにすることを目的としている。なお、森の政治に関するまとまった著作が少なく、多数の著作——日記や対談・講演を文字化したものも少なくない——の中に政治についての考察が散在していることを考慮して、正確な典拠を示すため、以下の論述では直接引用を多用することを予め断っておきたい。

II 現代日本の社会の特徴

森の日本の社会¹¹⁾の現状認識は、かなり早い時期に示されている。すなわち、日本語に対するフランス語の進歩性を述べた、渡仏後6年半程経った1957年3月15日付の日記の中で、森は、日本の社会に対して悲観的な判断を下しているのである。

仏語は近世学術、殊に数学、科学のような精密科学と、近代文学を生み出した言葉である。日本語はそれらをうけいれようとして必死の努力をしている言葉である。……日本語は思考の全内容をエクスプリシトに表わすことが出来ず、未分の状態（しかしその中に凡ては在る）でうつし出す。エクスプリシトはより進歩した状態である。……本質的に意味のあることは、日本語そのものの密度を高めることである。そしてこれは単に個人の仕事ではなく、社会全体の問題である。文明というもののこの方向性を正確にとらえている人が何人いるだろうか。自由、個性の尊重とそれは深くむすびついている。その意味で僕には今の日本全体は戦前の軍国主義と同じことをしているとしか思われぬ。殆ど絶望の状態である¹²⁾。

10) 森・垣花『現代の省察』、200-1頁。

11) 森は、「社会」の概念を広狭両義で使っているが、以下、特に断らない限り広く人間の集団生活の意味で用いる。

12) 『森有正全集』第13巻（1981年、筑摩書房）、69-70頁。

ここで言われている「今の日本全体」は、何よりも、戦前の保守政党と大同小異の自由民主党が、普通選挙による信任を得て政権を担当し、金や役職による票の買収を伴う派閥的な総裁選挙の結果、岸 信介を破り、同党総裁・首相に選ばれた自由主義的な石橋湛山の内閣¹³⁾が、同氏の病気により2箇月後の2月23日に総辞職し、後継者に東条英機内閣の商工相などを務めて総力戦体制を推進し、A級戦犯容疑者として逮捕、収容され、対中国関係改善にとって障害となることが予想された岸¹⁴⁾が党内の抵抗なく選ばれ、国家主義的な路線を取っていたことを指すものと解される¹⁵⁾。

日本の現状が「殆ど絶望的な状態」だとすれば、先見の明のある少数の知者である森は、この国に見切りをつけ、これと絶縁する道を選ぶのであろうか。否、そうではない。森は、続けて書く。「露伴は、日本的伝統によって貫いた。だから可能性をのこしていた。鷗外、漱石、荷風は伝統へもどって行った。しかしもう戻る道の無意味さが判った僕はどうすればよいのか。たとえ絶望的に見えても前進する外はない。」¹⁶⁾と。森は、絶望的な現実にも拘らず、日本語を明確な言語にまで高める、それ故、日本を自由と個性を尊重する国に変える可能性を求めて前に進む道を選択するのである。翌3月16日付の日記にも、彼は記している。「日本に対する絶望感が実に大きい。しかしもうこのことを口にするのは一切よそう。ただ自分の道をたゆまず歩いてゆくだけである。」¹⁷⁾その後の森の歩みは、3月15日付の日記が示唆しているように、この「自分の道」の中には、政治を始めとする日本の改革のための言論活動も含まれていたことを示しているが、日本の政治の問題点を考察する前提として、本節では、まず、彼の現代日本の社会の現状認識の内容をより詳しく見ておきたい。以下、その特徴として8点だけ取り上げる。

森によれば、現代日本の社会の第1の特徴は、本節最初の引用文がほのめかしているように、戦前の社会との基本的な同質性である。渡仏後16年経って日本に戻ってきた森が何よりも感じたのは、日本、具体的には東京が以前と変わっていないという事であった。森は、書く。

東京は外観の上でさえ変わっていなかった。高速道路、高層建築、そういうものも戦争があろうがなかろうが当然東京が造るはずであった高速道路、高層建築にはかならなかった。この近代化は東京の近代化、さらに適切に言えば近代の東京化であって、それ以外のものではなかった。これは明治以来の日本の西欧化、より正確には西欧の日本化であって、全く軌を一にしているとい

13) 総裁選挙の経緯については、たとえば、升味準之輔『現代政治 1955年以後』下巻(1985年、東京大学出版会)、31-8頁参照。

14) たとえば、正村公宏『戦後史』下(1985年、筑摩書房)、75頁。

15) 1967年8月16日付の次の文章が、その傍証になる。「問題ははなはだ深刻である。そしてその問題の性質は、あらゆる外観上の相違にも拘らず、20年前の大戦前にあったものと依然として非常に似通っているのである。私はなにも、政治指導層がその中核において殆ど変化していないことだけを言っているのではない。それもあるが、そういうことが大多数の国民の意思によって可能になっている、現下の日本全体のことを考えているのである。」(『変貌』、『旅の空の下で』、1969年、筑摩書房、26-7頁)

16) 『森全集』第13巻、70頁。

17) 同上、71頁。

うほかない。そこには何の新しいものもなかった。東京は旧い東京のままでそこにあった。……それは外からくるものを決してそのままでは受けつけず、日本化せずにはおかない、あるいは外部のものに、そのままでは、耐えられない日本なのである。それはさらに遠く遡って、千数百年前の大陸文明の摂取以来一貫して認められる日本の大きい傾向である。こういうことは、外形だけの問題ではなく、言葉、考え方、生活様式の隅々まで支配している¹⁸⁾。

森は、東京の基本的な不変性についてより具体的に述べている。

東京をそういうものとして印象づけられたことは、そこに、古い江戸時代からの建造物の美しさを更めて認識することによってさらに強められた。……何と言っても圧巻は旧江戸城の城壁と城門、それらを含む濠割で繞らされた一帯である。……すくなくとも私には、旧江戸城が、その内部の宮城は戦災で灰燼に帰したとしても、その規模と構成によって、近代化された東京を見事に支えてたじろがないのを感じたのである。そしてそれはまさに、そのビル街が、よかれあしかれ、日本人によって摂取された近代欧米風のビルだということに理由があるように思われた。……様式的統一をかく、その意味でほとんどアモルフとも言える東京のビルは、その色と形体だけによって、すなわちその純粋な外面性の故に、旧い江戸城の布置と折合っているのかもしれないのである¹⁹⁾。

つまり、森によれば、近代欧米風の建造物も、江戸時代以来の日本のそれに同化され、調和しているというのである。

現代日本の社会、特に政治の基本的な不変性については、翌年に書かれた「変貌」の中でより詳しく述べられている。森は、注15)に引用した文章の後に続けて主張する。

これは民主化の歪みの問題である、などという言葉で片づけるには余りに深刻である。……問題はもっとずっと深い層に起っているからである。いな、それは問題とさえ言うことは出来ないであろう。それは、問題が問題になる仕方に拘るほど深いところにあるからである。民主化、民主主義という言葉は、それ自体では何の意味もないもの、あるいは意味ありげにみえて、意味のないものである。民主という言葉で表現するほかないものがすでに中核に在るある事態がそこにあって、はじめてこの言葉はそれを表現するものとして意味をもつのである²⁰⁾。

森は、ここで、民主主義は、その意味と限界とを理解し、その必要性を自覚した人々が実現する、

18) 森「遙かなノートル・ダム」(1966年11月18日)、『遙かなノートル・ダム』(1967年、筑摩書房)、81頁。

19) 同上、85-6頁。

20) 森『旅の空の下で』、27頁。

言い換えれば、勝ち取るものだと言っているように思われる。

こうした戦前戦後の日本の基本的な不変性は、日本にはこれまで革命がなかったという第2の特徴と密接に結びついている。森は、日本の歴史を学んでいるフランス人のある若い女性の学生兼教員との会話として、次のように語っている。

日本の歴史では革命がぜんぜんないということは、実に驚くべきことだということです。明治維新は革命でないということです。彼女は。將軍様は公爵になって貴族院議員かなんかになっちゃうし、もちろん天皇陛下は変わらない。つまり旧時代の偉い人がまた名誉のある地位にあって新時代に入っている。前の時代にさかのぼっても、いわゆる革命はぜんぜんない。もし一つの社会が進歩するならば、そういうことはあり得ない、とこう言うのですね²¹⁾。

この種の文化は、たとえば、チェスとは異なり、相手から奪った駒を自分の駒として使える将棋にも現れているように思われるが、これに対する森自身の意見は、以下の通りである。

社会というものはほっといたら絶対進歩しないで停滞してしまう、ほっといてもできる革命は絶対ない。進歩する場合は必ずなにか無理をして進歩しているわけですよ。ソ連の共産主義革命はもとより、フランス革命でも、イギリスの産業革命でも、ある部門をこわして先へ進んでいるわけでしょう。それは社会の進化というものの意味で法則みたいなものじゃないでしょうか。日本はそれをあまりにも避けすぎてきた。だから関係というものに基礎を置く人間のあり方が徹底的に保存されてしまったわけです。これはいい面だという見方も成り立つかもしれないけれども、私は必ずしもそうだとは思わない²²⁾。

後の1971年の著作の中で、この日本の不変性について森は、より具体的に説明している。「ごく大ざっぱに言えば、ヨーロッパの社会が古代から中世、近世、近代、更に現代へと質的发展と変貌とを遂げたのに対し、日本は、古代氏姓制度から、最近の天皇絶対制に到るまで、その根本においては、古代の制度の内部的合理化にすぎず、その内閉性を超越する組織転換が甚だ不十分にしか、あるいは全く形式的にしか行われなかった、ということである。」²³⁾

けれども、森によれば、革命が人々の考え方を大きく変えるのではない。彼は、フランスを引合いに出して語る。「近代のブルジョワ革命の最初に起った国のようなもんだけれども、とにかくやはり民衆の考え方がそのためにそんなに変わっちゃいないんですよ、そのたびに。むしろ革命の前

21) 森・垣花『現代の省察』, 145頁。

22) 同上。

23) 森「出発点 日本人とその経験 (b)」, 『経験と思想』(1977年, 岩波書店), 99頁。

からフランス人独特の民主的な考え方があったでしょう。」²⁴⁾

「こうした日本の社会の基本的な不変性を生み出す人間関係の内容——これもまた不変なのであるが——は何か。森によれば、「関係という場合に、それは必ず上下の関係を含んでいるのです。大きくは一種のヒエラルキーに体系づけられるような関係を持っている」のである²⁵⁾。この人間の上下関係が、森の見た現代日本の社会の第3の特徴である。より具体的に言えば、こうしたヒエラルキーとは、「もっとも進んだ近代的工業を操作する人々が超封建的構成をもつグループを形成したり、もっとも進んだ社会分析に従事する学者が、親分、子分の師弟関係をとる」²⁶⁾といった現象を指す。この場合、もし彼らが民主主義を標榜しているのであれば、これは、価値志向と価値意識の乖離の問題ないし言葉と行動のそれである。

「それでは、ヒエラルキーまたは序列の考えがなぜ日本の社会において重んじられるのであろうか。森によると、それは、(これが問題なのであるが)「責任を実際に働く人からほかにそらせるということにある」²⁷⁾。ここに、森の考える現代日本の社会の第4の特徴である、当事者が自分の責任を取らないことが登場する。その中心にあるのが、天皇制である。森は、続ける。

それは昔から、たとえば政治権力のあり方からしてそうですよ。たとえば天皇家が、いわゆる、無目的に絶対権力を握っているということは一種の年功序列でしょう。いちばん古い家なんだから、そこに全部集められるわけでしょう。だれもそこに手をふれようとしない。ふれたら日本人が立っている原理はひっくり返る。その代わりそこの全責任的地位にいる代わりに彼は絶対に責任を行使しない。実際は下のやつがみんなやっているわけだから。しかし責任は形式的にそこまですぐいっていいですね。そういう責任のあり方と結びついた、これまた一種の日本人が自分で責任をかぶるまいという性質があると思うのです。それと結びついている。しかし、天皇のところ責任がいても、天皇が実際にやっていないんだから、結局、無責任体系というところに帰してくるわけですよ。……またその無責任体系の中に自分があるというので、安心して力いっぱい働ける。それはへんな話で、責任をとらなきゃならないということになると体がすくじやうという性質があるのじゃないですか。日本人には²⁸⁾。

この発言が、昭和天皇についても全面的に当てはまるかは疑問である²⁹⁾が、それだからこそ、象徴制を採用している現行憲法の下においては、「政治上の問題としての天皇制は存在しない筈」であ

24) 森・垣花『現代の省察』、82頁。

25) 同上、145-6頁。

26) 森「変貌」、『旅の空の下で』、25頁。

27) 森・小田『人間の原理を求めて』、161頁。

28) 同上。

29) たとえば、井上 清『天皇の戦争責任』(1975年、現代評論社) 参照。

り、「天皇は国家の元首でさえもない」と解する森にとって、憲法制定者と制定手続に関する不信と疑義、更には日本国民の民主主義的性格に関する不信など一切を天皇制そのものと考えよく聞く論議は、全く的外れであり、「人間における責任の問題こそは、天皇制の中心であり、責任の問題の明確化こそこの論議のもやもやを払いのけ、それに関連して、自己の権利の意識も明確になって来る」のである³⁰⁾。

現代日本の社会の第5の特徴は、森によれば、一般国民が身近なところにしか関心を示さず、将来に対する確信もなく、物質的な快適さの追求に熱中していることである。「遙かなノートル・ダム」において、森は書く。

日本の現在の消費生活にあらわれたコンフォールの熱狂的追求は外から来た人の目を驚かせるのに十分である。日本が現在一方の陣営に組みこまれ、しかもその組みこまれていること自体に何の熱意も確信もなく、一方の陣営に属する利益だけを享受して、その犠牲を避けようとする中途半端な、みえすいた態度は、日本が国運にある意味で賭けざるをえない事態に対して、人々を十分以上に懐疑的にする理由になっている。……それで直接的には自分の一身一家、大きい目ではせいぜい自分の直接属している会社、学校、商店、役所のことを考えるばかりである。……これが危険な傾向でなくて何であろうか。というのは、自分達の一身一家も、属する会社、学校も、実は日本全体の運命をほかにして考えられず、その運命如何によっては、すべてが一夜のうちにくつがえってしまうことを知っているからである。だから私の会ったたくさんの人々は、内心ほとんど絶望的になっているのである³¹⁾。

こうした物質的な豊かさを、しかし、同時に多くの人々に絶望感をももたらしたのが、「国民所得倍增計画」を打出した池田勇人内閣以降の経済成長政策である、と森も見ていた。彼は、「大陸の影の下で」(1971年11月)の中で述べている。『『日本は周知のように驚異的な〈経済成長〉をとげた。それはあたかも良心に何かとがめを感じずる者が、それを忘れるために猛烈な活動に身を投ずる』のにも似ていた。何かそれは経済大国という無視しえない既成事実を作り上げることによって、原理の問題を『力で』のり切ろうとするかのような印象さえあたえる。』³²⁾と。

現代日本の社会の第6の特徴は、森によれば、自己満足的な鎖国状態である。森は、「感想」の1節を成す「変化と交替の時代に」(1971年7月)の中で述べている。

1年ぶりでパリから東京にもどって来て、……現在の日本が、ほとんど無意識的にはあるとしても……、世界の状況に対してはなはだしく無感覚になっている、極端な言い方をすると一種

30) 森「30年という歳月」(1974年11月『世界』),『遠ざかるノートル・ダム』(1976年,筑摩書房),26頁。

31) 森『遙かなノートル・ダム』,97-8頁。

32) 森『木々は光を浴びて』(1972年,筑摩書房),143頁。

の自己満足の鎖国状態に陥っているのではないかとさえ言われかねないと思われたのである。

.....日本人は自分に利害、血縁その他の上で直接触れる世界とそれ以外の世界とを区別し、そこに内と外との別が生じ、内に対しては極度に敏感になるのに、外に対しては全く無関心である。やや大まかであるが、それは国内と国外との区別にも適用出来る。日本人が戦後ひどく国際的になったように見えるが、その深い理由は、それが対国内関係に有利に働くからである³³⁾。

森は、戦後の日本人の国際化は、打算による見せかけだけのものに過ぎず、依然として日本人は、基本的に他国に対して無関心であることを見抜いていたのである。したがって、国際関係でも日本の社会は変わっていない、と森は見えていたわけである。

こうした自己満足を助長しているのが、森によればマスコミである。対話の相手である垣花が、テレビ番組を「与える側は、私は徹底的に保守主義だと思いますよ。現状満足主義、受け取る側もそうだと思うのですよ。.....テレビやラジオや新聞のメディアが、いかに進歩的な言辞を弄しても、けっきょくは自分がその上にたっている現状の権力機構を保つことに役立っていることは明らかです。」と発言したのに対して、森が、「それはもちろんそうです。」と応じている³⁴⁾のである。それ故、この反対の立場、すなわち現状を批判的に見る姿勢の欠如が、森の見る現代日本の社会の第7の特徴である。

ここに、最後に、現代日本の社会の第8の特徴として、倫理性の欠如が森によって挙げられることになる。森は、語る。

日本をみて気づいたことは、.....日本人の生活とっていいか、あるいは存在における倫理性の欠如ということなんです。教会や宗教のモラルでない、宗教に支えられていないライック（世俗的存在）のモラル、国民道徳にさえ支えられていないモラル、これの伝統がたとえばフランスの社会では非常につよい。これがあるためにフランスはどこまでいっても、たとえば宗教の社会的勢力が弱まって、社会生活に倫理性がなくなっていくんですよ³⁵⁾。

これらの現代日本の社会の特徴は、そのこと自体を意識してまとめられたものではなく、森の著作の中に多くは断片的に見られるものを再構成したに過ぎない。したがって、森自身にこのことを問えば、外にも挙げたかもしれないし、何よりももっと整理して論じたであろうが、これらの多くは、それまで指摘されてきたことである。たとえば、評論家の加藤周一は、森の没後ではあるが、「日本社会・文化の基本的特徴」の中で次の5点を挙げている³⁶⁾。(1)競争的な集団主義。これは、

33) 同上、223-4頁。

34) 森・垣花『現代の省察』、128-9頁。

35) 木下・丸山・森『経験・個人・社会』、21-2頁。

36) 加藤周一・木下順二・丸山真男 武田清子編『日本文化のかくれた形』（1984年、岩波書店）、17-46頁。

集団間及び集団内の激しい競争によって特徴づけられる集団志向性である。この集団を特徴づけているのが、①体制順応、②少数意見の排除、③厳格な上下関係の3要素であり、更に、内部競争の激しさが集団全体の能率低下を招くのを回避する仕掛けとしての全体責任制が、指摘されている。(2)現世主義ないし文化なかならず世界観の此岸性と超越的価値の不在である。これは、実用的な技術主義や享楽主義、美的装飾主義、革命の不生起、個人の行動様式としての便宜主義、大勢順応主義、芸術における部分強調主義として現れる。(3)歴史的時間の欠如した現在主義である。これは、「いつ始まるともなく歴史が始まり、いつまでということはなく、ただどこまでも現在が続いてゆく」という時間観であり、その典型的なものが、未来のことを思い煩わぬ楽天主義と状況の変化に対する素速い反応である。(4)集団内部の秩序維持装置としての極端な形式主義と極端な主観主義ないし主観的な「気持」尊重主義である。前者の典型的な現れが、独特の儀式と名目尊重の習慣であり、これらは、社会生活全般に見られる複雑な儀式の体系と「言葉が示す物や現実よりも、言葉そのものを尊ぶ風習」を意味する。後者は、「実際にはどういう行動をしようとも、当人の心が大事だというもの」であり、その例が、犯罪や事件における動機の重視や、「以心伝心」を理想的な意志の疎通法とみなす考え方である。(5)対外的な閉鎖性と最強国との同盟関係である。前者は、(1)～(4)に見られる文化の体系の対外的反応であり、後者は、国際的孤立に対する恐怖の現れである。

加藤と森の違いは、主として、森が、日本の社会の不変性を強調する点、そこに倫理性の欠如を見る点、並びに個人の責任の問題を天皇制と結びつけて捉えている点の3点にある。

以上のような日本の社会の現状と密接な関わりを持つ日本の政治の問題点を、森はどう見ていたのだろうか。次節では、主として、対外的に日本を代表する行政府に焦点を当て、森が度々発言した中国との関係を中心にしてこの問題について論じたい。

Ⅲ 現代日本の政治の問題点

森は、「木々は光を浴びて」(1970年11月)の中で、日本に数年間滞在したことがあるパリ育ちの若いフランス人女性の衝撃的な言葉を紹介している。

かの女は急に頭をあげて、殆ど一人言のように言った。「第3発目の原子爆弾はまた日本の上へ落ちると思います。」とっさのことで私はすぐには何も答えなかったが、しばらくして私はその言葉を否定することが出来なかった。それは私自身第3発目が日本へ落ちるだろうと信じていたからではない。ただ私は、このうら若い外人の女性が、何百、何千の外人が日本で暮らして感じていて口に出さないでいることを、口に出してしまったのだということが余りにもはっきり分ったからである。かの女は政治的関心はなく、読書も趣味も友人も、ごく当り前の娘さんである。まして人種的偏見など皆無である。感じたままを衝動的に口にしただけなのである。

胸を搔きむしりたくなるようなことがこの日本で起り、そして進行しているのである³⁷⁾。

ここに見られるのは、日本の現状に対する深い失望と日本人への警鐘であるが、この現実に対して、だれよりも日本の進路を切り拓く任務を持つ行政政府を構成している政治指導者達は、どう関わっているのだろうか。

森が彼らの中に見出した問題点の第1は、状況認識の不適切さと、的確な大局的判断能力並びに迅速な行動力の欠如であった。たとえば、「パリで中国を想う——市民の感想——」（1971年）という一文の中で、日本政府の対中国政策について、森は嘆く。

先刻テレビのニュースを見ていると、中国訪問が、ニクソンによって受諾された旨を報じていた。事柄はその当然の論理をたどったのである。歴史は形式論理的には動かないかもしれない。しかし人間社会の実質的論理には容赦のないものがある。それは独ソ開戦からベルリン陥落まで働いた苛烈な論理と同質のものである。この論理は深い意味で倫理的ニュアンスをさえ帯びている。問題は、こういう論理にいつ気がつくか、ということであろう。また気がつく「動機」にもいろいろあるであろう。しかし現政権下のわが国に関する限り、この論理はもう辿られてしまったのだという感が深い。つい先日、内閣改造直後、福田外相が記者会見で「秋の国連総会における中国の加入問題はまあ時間もまだあることだから、よく考えて対処したい」というのを聞いて、一体何ごとかと思った³⁸⁾。

ここで言われている「論理」については、同様なことを論じた「大陸の影の下で」の中でより明確に述べられている。

この「人間」の論理は、「経験」の論理であり、行動のたびに、そのつど、その時の新しい現実によって、新しく規定されて発現して来る論理であって、決して直線的に予測したり、支配したりすることの出来ないものである。……それは自由と一体になった論理であり、それを辿るのは、その中で賭ける外はない論理である。その動機は唯一つで、「ある正しいこと」をその中に感じ識別することだけである³⁹⁾。

森は、米中和解が政治の世界で何を意味するのか分らず、日本の国益に合った適切な対中国政策を迅速に打ち出せない第3次佐藤栄作内閣を、担当閣僚の福田赳夫に代表させて批判しているのである。

森の見る第2の問題点は、日本政府の政策立案能力と主体性の欠如である。森は、「パリで中国を想う」の中で、更に慨嘆している。

37) 森『木々は光を浴びて』、69頁。

38) 同上、102-3頁。

39) 同上、143-4頁。

政府は中国に対してはなんの一貫した政策ももっていないではないか。アメリカの対中国政策に賛成することしか出来ないではないか。ニクソンが中国に行くと言えば、たった3分前に予告されて一言の抗議も出来ず、国民の死活に関する軍事基地を提供し、安全保障条約で一心同体になっていながら、無気味な沈黙を守ることさえ出来ず、平和のために結構だと言っている。そして、ニクソンが日本のために弁じてくれるのを期待しかねない様子である⁴⁰⁾。

その後の中国問題への対応も、救い難いものであった。森は、「大陸の影の下で」の中で書いている。

その後中国の国連加盟が実現し、やがてニクソン訪中が実現されるという。日本は国連総会を繞って、不可能かつこっけいな蠢動を続けて敗れた。さらに最近では、保利書簡の問題がある。こういう不可解なことが次々に起るようでは、日中国交回復は仲々難事であろう。テレビや新聞の解説も醜態を通りこして一種なぞめいてくる。日本の病根がここまで深いとは誰が想像したであろうか。そこには何の決意も新しい行動もなく、ただむり押しと空しい解釈のむなしいつみ重ねがあるだけである⁴¹⁾。

森は、更に、日本の国際政治上の位置について、満洲事変以来の40年間を総括的に述べている。

たしかに現実の戦闘状態は、1945年8月に日本の降伏をもって終結したが、アメリカと協力する日本政府の中国敵視的政策は今日まで続いて来た。

他方それまでの敵国であった米国に対しては、1945年8月以来、180度の転廻をとげて友好関係に入り、講和から現在の改訂安保条約に到るまで、政府は政治、外交の凡ゆることにおいてアメリカと歩調をとともにして来た。そしてその基盤の上に経済復興と再建を行なって来た。それはある程度まで達成されたように思われる。しかしこのアメリカと歩調を共にする代償として、蔣政権と条約を締結し、韓国と友好関係を結び、南ヴェトナムを支援し、当然の結果として中国と北朝鮮とからは決定的に遠ざかった。

そういう日本の行動が、今日わが国を国際政治の上でどういう位置においたか、それは中国の国連入りが実現した今日、どんな愚かな者にも判るようなかたちでようやく判っきりして来たよう

40) 同上、120-1頁。

41) 同上、144頁。ここで、「不可能かつこっけいな蠢動」とは、「中国の国連入りがほぼ確実になってからも、最後の瞬間まで、北京が絶対に認めようとしないう台湾政権の議席を維持するために、凡ゆる策動を続けた」ことであり（「大陸の影の下で」、同上書、130-1頁）、また、「保利書簡の問題」とは、時の佐藤首相が、中国との接近を図るため、福田外相の提案を受けて、日中国交正常化の考えを述べた保利 茂自民党幹事長の周恩来国務院総理宛の書簡を訪中する美濃部亮吉東京都知事に密かに託したが、それが佐藤政権への信用を失わせたばかりか、このことが北京で新聞報道されたことである（たとえば、正村『戦後史』下、372頁参照）。

に思われる。それと同時に、わが国の国内政治の状況は、その混迷の度が極致にまで達したように思われる⁴²⁾。

その後成立した田中角栄内閣が、公明党や社会党の協力を得て日中国交正常化に乗り出した際に、中国側がこれに積極的に対応したのは、森によれば、自民党政権を評価し直したわけではなかった。「8月15日の感想」（1972年8月15日付朝日新聞）の中で、森は言う。

新憲法が制定されると共に、国内のあらゆる面で民主化が発足した。それは革命までも可能態として含む動きであり、それは制度的にも保証されていた。

また軍備の放棄は、こういう方向を裏打ちするものと信ぜられて来た。しかしそれは建前のことであり、実質的には、国内的調整や建前と言葉じりを合わせることだけではなく、これまで侵略の対象となっていた国々という新しい具体的関係を樹立して行くかということであった。具体的には新しい革命中国とどういう関係を樹立して行くかということが試金石となっていたのである。安保問題、沖縄、殊にベトナム戦争をめぐって、その軍事基地問題は、そのテストであったが、それは中国や国内の世論の一部が期待するようには解決しなかった。

他方、日本は対米関係調整を枢軸として、その経済的復興をとにもかくにも達成した。これは一つの事実である。安保や沖縄問題をめぐる国内の激しい闘争は我々の記憶にあらたである。それは日本という国がもつ一見どうにもならぬ体質を明らかにした。すなわち革命を起すことができない、という、ほとんど宿命的にもみえる体質を明らかにした。中国が自民党政権との公式交渉にのり出して来たのは、そういう日本の体質に対する決定的診断書であろう。もちろんそこには米ソと関連する大きい外交的ニュアンスもあるであろうし、また中国の国内事情もあるであろう。しかしそれは要するにニュアンスの問題であって、原則ではない。診断書に対応して行動しているのである。

だから、根本的には革命中国の利害の関心が根底にある⁴³⁾。

森が、日中国交正常化へ向けての田中内閣の強い決意と具体的な取組み⁴⁴⁾を知っていたかどうかは不明である。しかし、その後中国側が復交3原則を基本的に譲ることなくそれが実現したことは、森の中国政府観が基本的に正しかったことを証明している。というのは、日本に少なくとも日本国憲法に合致した、民主的で平和主義的な自立的政府が実現することが最善だとしても、戦後4半世紀経ってもこれが実現せず、近い将来も期待できないとすれば、次善の策として、米中接近が実現

42) 森「大陸の影の下で」、『木々は光を浴びて』、129頁。最後の文章は、次の引用文からも推測されるように、沖縄返還協定の審議を巡る国会内外の混乱を指していると解される。

43) 森『遠ざかるノートル・ダム』、43-4頁。

44) たとえば、升味『現代政治』上、213-22頁、正村『戦後史』下、393-9頁参照。

した好機に、それまでの政府とは異なり、国交回復に積極的な自民党政府と基本原則の範囲内で交渉を進めることが、中国の国益に適うと中国政府が判断した⁴⁵⁾、と推測されるからである。

ここに、日米関係と経済を最優先し、国是として選択した政治原理としての民主主義と平和主義を実現できないこと、換言すれば、旧体制からの転換ができない現代日本の政治が、批判されている。これが、森の見たその第3の問題点である。

こうした内面化されない日本人の民主主義については、たとえば、丸山眞男も、別の角度から論じている。

現実の時勢だから順応するという心理が日本の現在のデモクラシーをも規制している。現実への順応の態度、それは権威から来るもの、外から来るものである。デモクラシーが内容的な価値に基礎づけられないで、権威的なものによって上から下って来た雰囲気自分に自分を順応させているだけである。……こういうデモクラシーは危っかしいデモクラシーである。何故なら情勢によるデモクラシーであり上から乃至外から命ぜられたから「仕方がない」デモクラシーだから、情勢がかわり或いは権力者がかわれば、いつひっくり返るかわからない⁴⁶⁾。

このような、森にとっても現代日本の政治の最大の問題点である、戦前と変らぬ本体について、更に彼の認識と見解を見ておきたい。渡仏後2回目に帰国した際の鼎談の中で、森は、この問題に関してより具体的に語っている。

国際情勢は戦前からみても、戦中戦後になってからも非常に変わったにもかかわらず、「日本」の実体はほとんどまったく変わっていない。……批判して越えていかなければならない、いろいろな問題がほとんどそのまま、いや完全にそのまま残ってしまっている。天皇制の内容が変わって神である天皇が国民統合の象徴である天皇になったとか、議会制度が昔よりも民主的におこなわれるようになったとか、そういうことがいくら言われても、そんなことではごまかすことのできない日本の社会独特の非常におくれたあり方というのが、今日なおずっとつづいている。……たとえば……東京の街のあり方、その性格は変わっていない。ある意味では戦争前の東京とまったく同じですよ。これはすべて悪いことだとは思っていない。東京が東京の性格をもっていることはよいことです。しかし同時に、克服していかなければならない根本的なところもまったく変わっていない⁴⁷⁾。

45) 正村『戦後史』下、398頁も参照。

46) 丸山眞男「日本人の政治意識」(1948年)、『戦中と戦後の間』(1976年、みすず書房)、348頁。

47) 木下・丸山・森「経験・個人・社会」、18-9頁。

ここで言われている「日本の社会独特の非常におくれたあり方」であり、「克服していかなければならない根本的なところ」、すなわち「時代おくれの観念や組織を解体し、日本の本当の民主的解放を達すべきである」⁴⁸⁾、と森は考える。そのより具体的な内容やそのための方法については、別の機会に論じたいと思うが、森から見れば、大多数の日本人は、敗戦からほとんど何も学んでいない。これを端的に表しているのが、中国との関係である。森は、「大陸の影の下で」の中で述べている。

戦後の対中国問題について我々国民は、条件こそ違っているが、敗戦に到るまでと本質的には同じような経験をし、同じように既成のメカニズムの中で動いてしまい、同じように手おくれになった事実をつきつけられているのである。敗戦による種々の不利な条件、戦前に比して比較にならぬほど改新され、進歩した民主主義的制度をもってしてさえそうなのである。そのことを率直にみとめなければならない。そして今日、日本の経済がほぼ立ち直るとともに、中国、アメリカ、日本の極東における関係は、日本の軍勢力の減退、すなわち今日までのこっている敗戦の現実そのものを除くと、ある程度似通って来ているのである。太平洋戦争の前には満州国の存在が中国問題処理の重大な障害となったが、今回は台湾問題がその凡ゆる相違にも拘らず、決定的障害となっている。しかもその論理がどんなに似ていることか⁴⁹⁾。

こうした不変の日本にあって、政府と米国に真向から対抗していた側は、どうだったのであろうか。森は、彼らについては余り言及していないが、同様な論文「パリで中国を想う」の中で、「記憶も多少確かでない点」があるとしながらも、若い共産党員達の意識と行動を紹介している⁵⁰⁾。森によると、1949年6月か7月に、仲介した研究室の助手の立会の下に、東京大学内の共産党員である学生達と極秘裏に会見を持った。その際、彼らは、9月には中共軍が九州に上陸する予定であり、これと共に国内改革も行われ、大学も改組される、既に〇〇先生はその責任者となって準備を始めた、については森（文学部助教授）もその準備に参加して欲しいと要請したという。これに対して森は、中共軍の上陸の可能性を否定し、その有無に拘らず、「急に泥縄式」にしなければならないことは何もない、⁵¹⁾「これまで通り授業を続けるだけ」だとして、学生達の要請を断ったという。森には、何よりも、「日本の改革は日本人自身が自主的にしなければならない」、という不動の確信があったからである。すなわち、森にとって、こうした情報とこれに呼応したとされる某先生に関して客観的に何も意見を言うことはできないが、たとえ大学生であっても、日本の革新を標榜する者が他国の軍隊を当てにすることは、彼らが事の本質を全く理解していず、甚だ残念だということだ

48) 森「1968年の夏の反省」（1968年10月）、『旅の空の下で』、110頁。

49) 森『木々は光を浴びて』、135-6頁。

50) 同上、104-5頁。

あろう。更に言えば、現在の政治の変革を目指す反対党の党員が中国に依存していることは、政権党と政府がアメリカに依存することと同様に、自治・独立とは相入れない、と森は考えるのである。

森は、「大陸の影の下で」の中で強調している。「我々は中国のことを考える時、まず我々自身のこと、日本の改革のことを我々自身の問題として考えなければならない。これが大前提であり、これなしには、中国はもとよりのこと、いかなる国とも正しい関係をもつことは出来ないであろう。」⁵¹⁾ 森は、正当にも、自国の問題点を正確に認識し、その改革に自ら取り組む者だけが、他国と正しい関係を結ぶことができる、と考えているのである。

一方、中国の側はどうであろうか。同じ論文の中で示された森の中国観は、次の通りである。

中国は、内戦と対日戦争の苦難と混乱の中に出現し、共産主義と民族自立の原理に基づいて、国家と国民生活とを組織し、自己の原理に関しては一切妥協することなく、国内的には、民主的な新しい、これまでの伝統と相容れないような制度と生活確立しようとするに伴う巨大な困難、ことに人民公社の組織や文化大革命による民主化徹底のための自己批判的行動を営み、対外的には、アメリカを中心とする反共陣営との軍事的、外交的、経済的対立の中に、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争に活発に対処するのみならず、全世界、ヨーロッパ、中近東、アフリカ、等に強い関心を向け、組織的援助を行い、その視野が世界全体と重なり合うことを示している。故にそれは単に一国を単位にしての方法的視野のみならず、地球的、あるいは全体的視野をもつものということが出来るであろう。8億の人口を持ち、3千年の歴史をもつこの国のかかる変貌は、第2次大戦後の最大の事件であった。こういう中国の姿を目のあたりに見ることは、ある深い、単なる反省以上のもの、一つの態度決定を迫る力をそこに感じさせる。事実かなり以前から多くの西欧諸国は、対中国的態度においてアメリカ陣営を離脱し、またニクソン訪中計画にみられるようにアメリカ自体も大きく方向をかえ始め、また今回中国が正面玄関から国連に入ったことは、その「方法」が、実に組織された「行動」であり、中国が自己をはこぶ「流れ」の主人となっていることを示している⁵²⁾。

ここで言われている民主性の内容や程度は、必ずしも十分明確でなく、また、文化大革命の評価についても疑問がある⁵³⁾が、共産主義と民族自決の原理を基に自国を組織し直し、地球大の視野の下に対外関係に取り組んでいる、と新生中国を森が非常に高く評価していたことが分る。

しかし、かつての中国は、そうではなかった。森は、1964年1月に蔣政権を捨てて中国と外交関係を樹立した際のド・ゴール大統領の発言内容を、これに賛意を込めて紹介している。「中国は世

51) 森『木々は光を浴びて』, 161頁。

52) 同上, 140-1頁。

53) 文化大革命の消極的評価については、たとえば、正村『戦後史』下, 399頁、関 暁野「ユートピアという一つの伝統」、L. マンフォード『ユートピアの思想史的省察』(1997年、新評論)、8頁参照。

界最古の国の一つであり、その文明の伝統は歴史よりも古い、しかし中国はこれまで『方法』を欠いていたので、その文明を有効に組織することが出来なかった。……『しかし今はこの古い国の方法的組織が始まったので、フランスは爾後中国と共に、種々の偉大なことを歴史の上に果たすであろう。』⁵⁴⁾この「方法的組織化」とは、「革命前の中国の民衆の生活は、革命を肯定せざるをえないものであったに相違ない。貧困と積年の兵乱、また日本軍の侵入によって破壊された生活の中で、革命は唯一の活路であったであろう」⁵⁵⁾と考える森にとって、「大衆の生活、その希望、その意志を基盤としつつ、他をそれとの関連から組織し直すこと」を意味していた⁵⁶⁾。

これに比して、日本の場合、事情は異なる。「なるほど大東亜共栄圏建設という一つの観念があったが、それは一つの理念として、政治の形態は、この理念を表現する目的・手段の関係に従って、現実的、客観的に組織されてはいなかった。我々国民は事が起るたびにまず驚き、次にその起った事がそれ自体においてはどの客観的見透しもないのに再度驚いた」戦前の失敗から日本は学ばず、戦後も中国に対して適切に対応していない、と森は見ているのである⁵⁷⁾。より具体的に言えば、森によると、過去4半世紀の間、日本及び日本人は、新生中国から態度決定を迫られ続けてきた——たとえば、戦争責任の問題は、「取りかえしのつかない問題」であり、「赦してもらえさむというような問題ではない」が故に、中国が損害賠償請求を放棄したのは、今次大戦における日本の責任が量り得ないものだったからではないかと彼は解する⁵⁸⁾——のであるが、米中関係とは異なり、敗戦国日本と中国との間には戦争状態が続いているのだから、「それは日本自体が自己を方法的に再組織することによってのみ答えることが出来る」性格のものである⁵⁹⁾。

森は、日本国政府が、中国を始め侵略したアジアの国々とその国民等に対してまず戦争責任を認めて謝罪し、可能な限り賠償も含む償いのための行動を起す（賠償金が不要と言われても、その支払いを申し出、断られても相手側が受け入れる形を探る）と同時に、憲法に従って自国を民主的且つ平和的な国として組織し直し、世界に非軍事のあらゆる貢献をすべきだ、と主張しているように思われる。しかし、現実の日本は、天皇主権の旧体制下の侵略・敗戦と国民主権の新体制下の4半世紀にも拘らず、基本的に戦前の体質と変らない国である。それでは、その根源は何であろうか。次節で、日本の政治の根底にあると森が考えている、日本人の基本的な精神的特質について考察したい。

54) 森「大陸の影の下で」、『木々は光を浴びて』、140頁。

55) 森「パリで中国を想う」、同上書、110頁。

56) 同上、119頁。

57) 同上、132、135-6頁。

58) 森「パリで中国を想う」、同上書、125頁、「現下の時点にあって思う」（初出、1973年1月『世界』）、『遠ざかるノートル・ダム』、51頁。

59) 森「大陸の影の下で」、『木々は光を浴びて』、141-2頁。

Ⅳ 現代日本人の精神的特質

森は、フランスの知人の見方だとして、現代日本人の最大の欠点について次のように述べている。「あるフランスの知人が日本人の最大の欠点として『限度を知らないこと』をあげていた。限度を知らない、とは、力関係において自己を抑え、規律することを知らない、ということである。世界第3の大海軍国、敗戦を知らない国、国民総所得自由世界第2位、等々、みな同じ発想であり、自己を外面的に他国と比べて一喜一憂している。凡て同じ発想であり、本当の標準が自分の中になことを示している。」⁶⁰⁾この限度のなさが、日本人の第1の精神的特質である。

このように、自分独自の生き方、すなわち価値基準を持たず、他国に外面的に優越しようとする日本人の傾向は、その第2の特質と結びついている、と森が考えていたように思われる。それが、仲間間でしか行動できず、第三者に対する想像力と共感に乏しいと共に、仲間を絶対化する傾向である。森は、主張する。「日本人は自分に利害、血縁その他の上で直接触れる世界とそれ以外の世界とを区別し、そこに内と外との別が生じ、内に対しては極度に敏感になるのに、外に対しては全く無関心である」が、「問題は島国だとか、過去の習慣とか、そういうことではなく、私ども一人一人の内部にひそんでいるのである。それは仲間同士の間でしか何かの行動をすることの出来ない性格であり、未知の第三者に対しては、外側から観察することしか出来ない傾向である。しかも私共にとって、仲間は絶対的になってしまう」⁶¹⁾。

こうした一種の閉鎖的な集団主義は、森によれば、日本人の第3の精神的特質である自己を持つ個がないこと、それ故第三者の欠如を意味する。森は、続ける。「それは人間が本当に自分という一人称的『個人』になり切れないことである。すべては二人称で呼ぶことのできる仲間（それは国家的規模にまで拡大しても）の間のことになり、そこには本当の第三者、一人称の個人もないのである。」⁶²⁾

これを具現している代表的なものが日本語である、と森は考えている。彼は、更に続ける。「日本語はこの日本人の社会性あるいは非社会性が代表的に示されるよい例であるが、人称がはっきりせず、敬語法が複雑に発達したこの日本語が示すように、上のような性格は、日本人の根底にまでしみこんでいるのであって、単なる心掛けや修養で改めることなど出来るようなものではない。」⁶³⁾それでは、日本人の精神の根底にあるものは、何であろうか。森は、これを独特の「体験」の存在形態に求めている。森は「木々は光を浴びて」の中で語る。

25年前の第二次世界大戦が終るまで、日本の思想や道徳は、君臣、父子、兄弟、主従の関係を

60) 同上、162-3頁。

61) 森「変化と交替の時代に」(1971年7月)、同上書、224-5頁。

62) 同上、225-6頁。

63) 同上、226頁。

軸としていた。ことに全体の中心をなしていた天皇中心的国家観は、国家と国民の生活の全体を陰に陽に組織する原理のようなものとなっていた。人はそれを天皇制と呼び、戦前の諸悪の根源のように言うけれども、実際は、それはむしろ古来の日本人の「経験」の構造に由来するものではないであろうか。むしろそれがおもてにあらわれ、制度や道徳の形に結晶した結果として考えることの出来るものではないであろうか。……自己の自己に対する責任と倫理を包含することなく、君臣の関係がすでに自己の意志を越えて存在しており、その関係の責任の「根拠」が自己になくて、関係そのものに在る時、そしてそれが自発的に当然うけとられるべきものとして要求される時、そういう関係の歴史的、社会学的因果づけは一応捨象して、そのものとしての説明を日本人の「経験」の構造に帰せざるをえないであろう。……その「経験」は、個人をではなく、二人あるいは複数の人間を定義するものである。これは単に仮設ではなく、現実であったのであり、また、現実である。それが「経験」である以上、人間にとって根源的であり、それを外部から矯正することは出来ない。たとえば、親子関係の事実上の存在がそのまま「経験」のこれ以上分析を許さぬ単位になっている、ということ、この複合関係から個人が決して脱出出来ないということ、これは思うよりは遙かに深刻なことである⁶⁴⁾。

ここで言われている「経験」は、森の他の著作の多くにおいては「体験」と表現され、経験と区別されている。森は、この経験を次のように説明している。

これが、「自分の経験」だという、「経験」の一つの層のようなものが自分の中にできはじめた。すべてはそれを通さなければ自分の中に入ってこない。実際、社会の問題にしろ国際的な問題にしろ、結局、自分の経験というものを通してしか入ってこない。この言い方はかなり判りにくいと思うので、経験という代わりに、今かりに自分の主体的態度——この言葉を私は好みませんが——そう言っておいてもよい。しかもそれは単なる心構えという程度のものではない。ある経験の厚みに支えられた主体的態度です。また経験といっても、内容的にいろいろ精密に規定しなければならぬと思いますが、とにかく様々な問題は経験を通してしか入ってこない。そして経験はある形で自分の判断の基準、行為の準則を明らかにしながら、同時に自分の中に累積されてくる⁶⁵⁾。

鼎談の相手の一人である丸山眞男が、「森さんが論文で書かれている経験というのは非常にむずかしくて、私にもまだよくわからないところがあるんです。」と語り、これに対して、森自身が、「概念的調整、あるいは体系組織の面では、私にもまだよくわからない点があります。」と吐露し

64) 森『木々は光を浴びて』、54-5頁。

65) 木下・丸山・森「経験・個人・社会」、19頁。

ているように、森の「経験」概念は難解であるが、この言葉の後に、「しかし、経験というのは、ある人間的事態を『経験』という言葉で呼ぶので、……それ自体としては非常に明白なものなのです。」と続けている⁶⁶⁾ように、森にとっては明白な概念であった。

「ひかりとノートル・ダム」(1966年8月15日)の中で、森は、より明確に書いている。

経験という言葉で私が意味するものは、一人一人の個人の他と置き換えることのできないある形成されたものであって、その場合、個人というのはもちろん抽象的な、生物としての一個の人間というようなものではなく、社会、歴史、伝統の中に、その問題をもって、また信頼と反抗とをもって内在する一人の人間をいうのであり、「経験」というものがその一人の人間を定義するのである。それは、空想、想像、観念としての人間像からはもっとも遠いもので、また個人主義というものとは何の関係もないものである。そのもっとも大きい特色の一つは、自分の内側から自分の意味が感ぜられてくることであるが、それも主観主義とは何の関係もない。

経験というものは、体験ということとは全然ちがう、……その根本のところは、経験というものが、感想のようなものが集積して、ある何だか漠然とした判ったような感じが出て来るというようなことではなく、ある根本的な発見があって、それに伴って、ものを見る目そのものが変化し、また見たものの意味が全く新しくなり、全体のペルスペクティブが明晰になってくることなのだ、と思う。したがってそれは、経験が深まるにつれて、あるいは進展するにつれて、その人の行動そのものの枢軸が変化する、ということをももちろん意味している。その場合大切なことが二つあって、一つは、この発見、あるいは視ることの深化更新が、あくまで内発的なものであって、自分というものを外から強制する性質のものではなく、むしろ逆にそこから自分というものが把握され、あるいは定義される、ということ、と同時に、それはあくまで自分でありながら、経験そのものは、自分を含めたものの本当の姿に一步近づくということ、更に換言すれば、言葉の深い意味で客観的になることであると思う⁶⁷⁾。

ここに、まず、内発的な根本的な発見があり、次に、これに伴ってものを見る眼が変化し、それが深化更新されて、次第に自分自身並びにそれ以外のものの本質に近づいて行く、各人に独自の「経験」の意味が、よく説明されている。

こうした経験と体験との違いについて森は、デカルトの哲学との関連において説明している。

歴史的に遡って考えてみると、近代合理主義の父といわれるデカルトは、精神と物体との領域をはっきり分けたわけですね。それは純粹概念と論理の支配する精神の世界と科学の対象となる物

66) 同上、32-3頁。

67) 森『遙かなノートル・ダム』、54-5頁。

質の世界とを区別しつつ確立したのですが、この場合、精神と物質とが結びつき干渉し合っている「人間」というものについて、デカルトは論理や科学における方法的な探求を一応放棄してしまうわけです。そこでデカルトは、ただ経験しか人間を導いてくれるものはないということを見出した。その経験の法則なり構造なりは、事後に自覚されてくるほかはない。経験は決して方法的に追求できない。私のいう経験は本質的にこれです。だから、一方科学的に分析できる対象はもちろん十分に科学的に分析し論理的にする。また概念によって規定できるものは厳密に規定する。そのときどうしても分析あるいは規定できないものが、人間の一つの現実として残ってくる。これが私の経験の対象になってくるんです。またこの経験からこそ概念的な分析にしても科学的な分析にしても、またそれを遂行しうる動力が、出てくると思うのです。体験というのは、科学的に分析されるべきものも概念的に規定されるべきものも未分化のまま全部合わせて体験といっているので、何かそれ自体だけで直観的にわかったようなものになってしまうので、私の経験ということとまったくちがうのです⁶⁸⁾。

以上のように、森の言う経験は、科学的、論理的には分析し得ない、内発的な突き動かしによって形成され、且つ自己批判的な要素を含んで生成し続ける、事後的にのみ命名可能な、各人に独特の事態だったのである。

また、森は、「経験」と「体験」とを次のようにも区別している。すなわち、「経験」とは、「自分の道具として使用できる体験とは異り、自分自身を定義するものとして他人と自分とに現れてくるもの、自分ということそのものがそれによって明らかにされるもの」であり、「自分とものとの関連にほかならない」⁶⁹⁾。したがって、森によれば、「経験をもつということは、人間が人間であるための基本的条件であり、一つの経験は一人の人間だ、ということである」⁷⁰⁾。その出発点は、あるがままの現実を認めることである、と森は考える。彼は、述べる。「標語やイデオロギーではなくて、自分が現に生きている条件、あるいはその条件の下に生きていることをまずそのまま受けとり、すでにそこに、それ以外ではありえない自分を確認することから出発すること、それが経験ということの第1の意味でなければならない。だから経験ということは、本当は意志的なことであり、人間が生きている、ということの承認以外のものではありえない。本当の思想はそこからしか出て来ない。」⁷¹⁾

森のこうした立場からすれば、「日本文化の在り方をふりかえるならば、そこに体験的要素がきわめて強く、外国から入ってきたものを、その経験の根底まで掘り下げて思索することをせず、む

68) 木下・丸山・森「経験・個人・社会」、19-20頁。

69) 森「ひかりとノートル・ダム」、『遙かなノートル・ダム』、68、55頁。

70) 同上、55頁。

71) 同上、66頁。

しろ逆に新しいものを自己の体験で理解しうるものに変化させようとする傾向が無意識のうちに強く働いていたように思われてならない」⁷²⁾。そうだとすれば、日本人の多くが、自己とそれ以外の他者や環境のあるがままの現実を認めるところから出発するという、経験の第1の意味すら理解していない、と森が見ていたことになる。こうした正確な自己認識と状況認識を欠いた人々から成る社会における政治は、的確な政策を打ち出すことができないことになる。

更に森は、述べている。「体験は、その本質上、群をつくり、徒党を組む方向に向かうが、経験は、その本質上、孤独な個人をつくり出すのである」が、「本当の経験の根源は自己の中にあり、自己を一個の人間として定義する基礎となる自己の促しにある。そこに本当の思想と経験との人とともに更新される新しさがある。そこに一人一人の人間が責任を負いうる根拠がある」⁷³⁾。森が「徒党」と書いた時に、たとえば自民党の派閥のことまで意識していたかどうかは分らないが、それがこの概念に含まれることは確かである。ここに、森に言わせれば、日本人が集団行動に向かい、個人としての責任を回避する傾向がある原因は、彼らが「体験」的な要素を基調とし、自己の内奥から湧き上がってくる促しに従って生きることが少ない点にある、ということになる。

したがって、第2節でも見たように、森によれば、こうした日本人の集団生活には倫理性が欠けており、それは、厳密な意味での社会ではない。森は、言う。

モラル・ライック（世俗的倫理）といわれるものが実は「社会」ということの意味だということです。モラル・ライックというのは社会を構成するおのおのの個の経験によって、各個人にまで、その支柱の根柢においては分析されてしまうその社会を構成している人間存在と結びついている。この結びつき方がモラル・ライックになっているわけで、それが向こうでいう社会ということの意味になっている。……こういう意味でのモラルがないということは、極端に言えば、社会がないということです。あるいはそういう個々の人格を定義する経験をもつ人間集団を「社会」と呼ぶのです⁷⁴⁾。

また、森によれば、日本人は、フランス人と異なり、テレビなどの新しいもの、便利そうなものが出ると、これにすぐ飛びつきがちであるが、これは、「自ら進んで平均化される」ことを意味し、「けっきょく自分の深い経験に基づいて自分で考えていくということに対する喜びがない」ことに帰因している⁷⁵⁾。

更に、自分の「経験」に基づいて考えることが喜びであるばかりでなく、それは、同時に権威の源泉でもある、と森は考える。その論理は、次の通りである。

72) 森「遙かなノートル・ダム」, 同上書, 84頁。

73) 同上, 87頁。

74) 木下・丸山・森「経験・個人・社会」, 22頁。

75) 森・垣花『現代の省察』, 127-8頁。

私どもが受け入れているもの、あるいは私どもの中に入って来るもの、そういう一つ一つにその所を得させ、その経験を醇化することによって、すべての人の経験が同じ一つの現実というものを目指すようになってゆく、これは非常に大雑把で私の話を全部要約して申しますが、そういうものが経験の醇化の過程である。経験が醇化された時にすべての人の経験は同じものを指さすようになる。それが私の根本的な考え方であります。その場合、経験の醇化というものは何であるかと申しますと、経験の内容のそれぞれの内実によりまして、一つ一つの経験がそのあるべき所に私どもの経験というものを定位させることです。……結局ある一人の人間に本当の権威を与えるものは、その人の経験というものが本当に醇化されて、あらゆる場合にあって一つの普遍的な姿を現わすようになることです⁷⁶⁾。

このように、森によれば、各人の経験を純化し、体系化することによって、それが万人に普遍的なものになり、それ故権威の源泉になる。したがって、森の立場は、普遍的なものを学ぶことによって普遍に至るのではなく、一見特殊に見える個個人の経験を深化し、純化することこそが普遍に通じる道である、というものである。

しかも、権威は、森にとって自由と同義である。森は、主張する。「それは実は言葉を換えて言えば、自由ということと同じ意味を持って来るわけです。これは私は決して概念的に言っているのではなくて、かなり乱暴なことが起りましてもしそれが本当にその人の経験の醇化の過程から出ているものであったなら、それはやはり一つの権威をもって他に向かって主張されるべきことであり、またそれが本当の自由というものを体現しているものである」⁷⁷⁾、と。

ここに、自由を介して権威と真理との関係、更には、権威と責任との関係が浮かび上がってくる。森は、続ける。

ですからその意味で権威というものは、単に社会生活として必要であるだけでなく、権威は本当の真理と結びつかなくてはいけないというのはそういう点にあると思うのです。

まず、キリストが言われているとおり、本当の真理に基づかなければ誰も権威をもっていないわけです。

それからその次には、権威というものと本当の意味で責任というものが一致して参ります。自分の本当の権威、経験からある一つのことを決定し、ある一つのことを要求する時に、本当に自分の言っていることに対して責任をとることができる。その時に初めて人間は、他の人に命令したり要求する権利が出てくるわけです⁷⁸⁾。

76) 森「権威について」(1971年10月28日)、『光と闇 森有正説教・講演集』(1977年、日本基督教団出版局)、137-8頁。

77) 同上、139頁。

78) 同上、139頁。

それでは、こうした点に関して、日本の現状はどうであろうか。森の見方は、これに批判的である。「私どもが自由を求める行為あるいはその他のすべての行為に、本当の意味での権威、更に言い換えるならば、真理に基礎を置き本当の事実に基づき、また本当にそれについて自分が喜んで責任を取りうる、そういうことがないということが、今日実に多くの問題に混乱を与えている。例えば平和の問題であっても、自由の問題であっても、その他の具体的なすべての問題においても、私どもはその労苦を省いているのではないだろうか。」⁷⁹⁾

森によれば、このように、真理と事実に基づき、それに責任を取りうる権威があらゆる行為に欠如していることは、政治を始め、日本の社会のあらゆる面に品位が欠けていることを意味している。森は、慨嘆している。「敗戦以後今日まで、昔から生きて来た私が経験することは、実に日本の社会のあらゆる面において、正しい意味において品位がなくなって来たことです。政治から私どもの日常生活に至るまですべてのものが非常に自堕落な風を帯びて来ております。これは結局私は、一人一人の人が自分の中に自分に対する本当の権威というものを打ちたててを怠っているからではないだろうか、と考えます。」⁸⁰⁾

V おわりに

以上のように、日本人の大多数が、各人の内面から湧き上がってくる促しに従って生きる時に生まれるはずの「経験」を持っていない、という精神的特質を有しているところに、政治を始めとして、現代日本の社会に見られる諸問題の根源がある、と森は考えていた。この「経験」を中核とする森の思想全体は、比較的早い死の訪れもあって、体系化されなかったが、こうした森の認識は、基本的に妥当であると考えられる。この森の中心概念を一つの重要な仮設として、日本の政治や社会、延いては、世界を分析することができないかどうか、検討してみるに値すると判断されるのである。そうすれば、たとえば、カレル・ヴァン・ウォルフレンの日本政治の分析⁸¹⁾を修正する可能性が出てくるように思われる。

79) 同上、142-3頁。

80) 同上、144頁。

81) たとえば、「決めた国策の責任を究極的に負える国政の中核」である政府が存在しないことや、「客観的に観察した結果としての実際の事実というより、心情的なイメージに合わせて構築された、そうあるべき“リアリティ”としての“現実”」(『日本／権力構造の謎』[上], 1990年, 早川書房, 36, 41頁)など。